

# 「ケンカ」のすすめ

あさくら としお 朝倉 敏夫 民博 民族社会研究部



## 日本語教師をしてみました

写真：1982年3月、全南大学校師範大学日本語教育科の教授、1期生、2期生が、わたしの送別のために感謝牌をくれた。タイトルは「一杯の酒」



全南大学校の建物。かつてはこの建物が大学本部であった。2015年12月11日に光州市に行く機会があり、久しぶりに訪ねてみた

韓国・光州市



フィールドで信頼関係を取り結び、道を切り開くものは何か。この3月に定年を迎えるにあたって、わたしの韓国研究のはじめをふりかえてみた。

### 「どっちが早いかケンカしよう」

フィールドワークには現地語の習得が不可欠である。わたしは韓国でフィールドワークをするため、一九七九年の夏から六カ月間、延世大学校語学堂とソウル大学校語学研究所で韓国語を学んだ。ひととおり韓国語を話せるようになり、翌年、韓国政府の奨学金を得ることができ、一〇月から光州市にある全南大学校に留学した。そのとき、外国人教授宿舎への入居を条件として、師範大学で日本語の講師を引き受けることにした。

当時、師範大学の日本語教育学科は設立されたばかりで、一期生九人の日本語会話と時事日本語という科目を教えることになった。わたしは最初の授業で、「わたしが韓国語がうまくなるのと、君たちが日本語がうまくなるのと、どっちが早いかケンカしよう」とアジった。

### 光州での日々

一九八〇年は五月二八日に光州事件があり、大学にもまだ殺伐とした雰囲気が残っていた。わたしは日本語会話の時間教室でおこなう必要もないうらと、大学の裏にあるブドウ畑に出て行って授業をおこなった。またソウルに行ったときには、日本公報文化院から日本文化を紹介するビデオを借りてきた。ところが師範大学には、それを見るための映写機がない。そこで映写機をもつと聞いた工科大学やアメリカ文化院に頼んだが、いずれも断られた。最後はケンカ腰で教育委員会に向き、師範大学の学生は将来日本語教師となる予定なのだから、なんとか映写する場所を貸してほしいと交渉した。

日本からの観光客は、ソウルから慶州、釜山に行くのが定番のコースであり、光州に来る日本人はめずらしかった。学生たちはわたしの日本語はわかるようになったものの、他の日本人に自分たちのことが通じるのか、不安に思っているようであった。日本から知り合いが韓国に来ることがわかると、光州までぜひ足を伸ばしてほしいと頼んだ。

授業を離れても、光州からバスで一時間半かけて全州市に行き、夜通し酒を飲み、翌朝ヘージャンスル(迎え酒)を飲み、それから旅人宿に泊まり、お昼に全州ビビンバプを食べて帰る全州一泊ツアーや、女子学生がお母さんの漬けたキムチをもつてきてくれると、週末に学生を呼んでキムチチゲパーティーを開いたりもした。また、学生たちに連れられてマッコリディスコに行き、韓国の人たちによく知られていた「ブルーライト・ヨコハマ」を舞台で唄わされた。

### 道を切り開くものは

三〇歳になる前のわたしは、まだ青二才であり、破天荒な教師であった。全南大学校のような地方大学ではなく、ソウルの大学に移りたいと学生の前で露骨に話す教師ともケンカをした。自分勝手な正義感をふりかざし、ケンカをうっていた。

ソウルの語学学校で習った韓国語は、あくまで美しい韓国語であった。光州に来て、学生たちとつきあうなかで、いろいろなシチュエーションでの会話力をつけることができた。ことに、さまざまな場面でのケンカが、わたしの韓国語の習得にとって、どれだけ役にたったかわからない。彼ら学生にとつてわたしはあまりよい教師ではなかったと思うが、わたしにとって彼らは最高の教師であった。今思えば、申し訳ない話であるが、そのためもあってか最初に彼らにアジったケンカは、わたしの勝ちになったような気がする。

八二年の三月まで、全南大学校に一年半留学するなかで、わたしは韓国の都草島という島でフィールドワークをおこなった。そこでの暮らしについては、最近刊行した『コリアン社会の変貌と越境』(臨川書店)にまとめたが、全南大学校での思い出はそれにも増してなつかしい。日本語教師をさせていただいたおかげで、今でも当時の学生たちとのつきあいは続いており、その学生の弟子や仲間までも、わたしが光州市に行くのを歓迎してくれている。



2010年12月4日、光州市の飲み屋に、かつての教え子たちがわたしの還暦を祝って集まってくれた